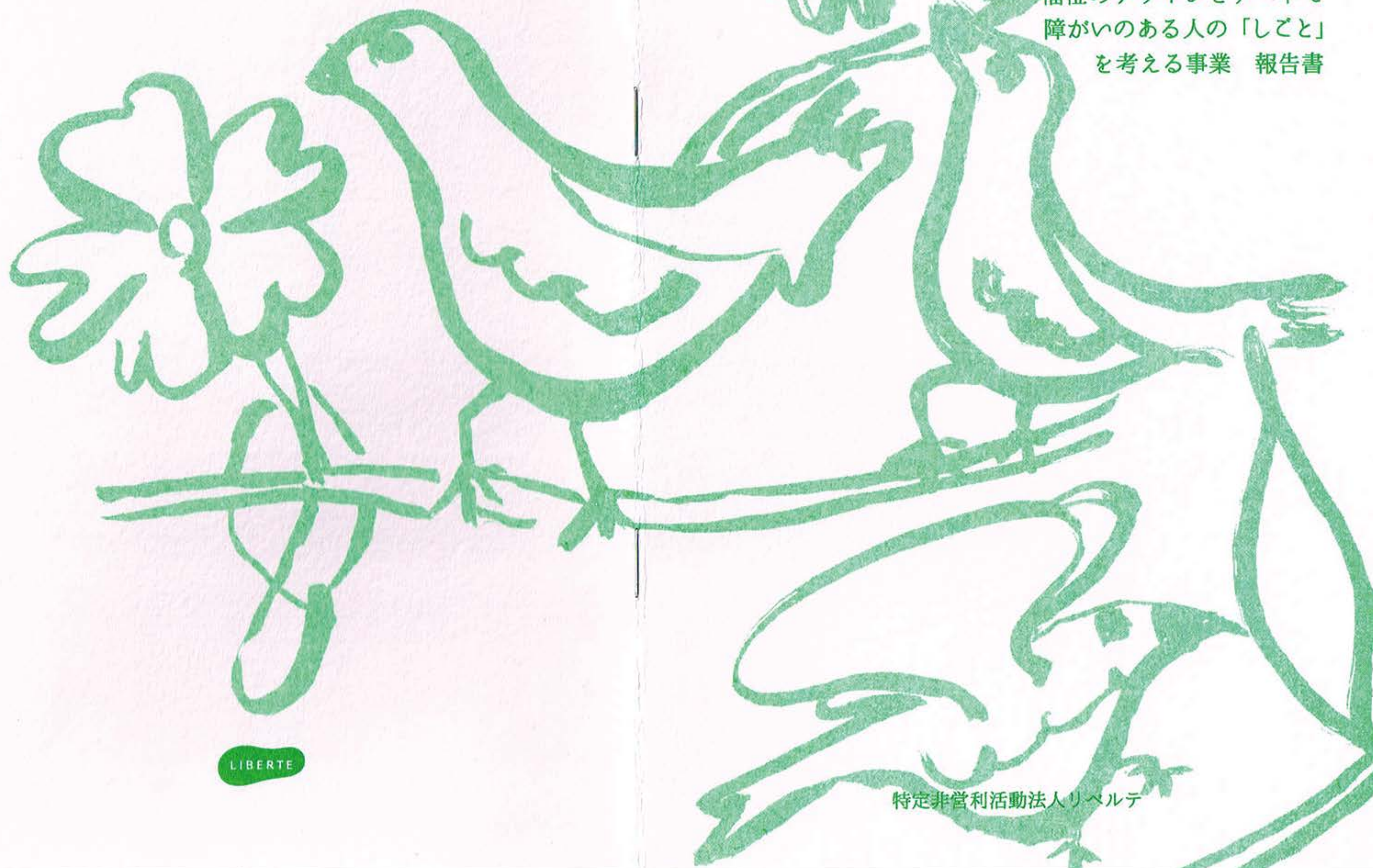


平成27年度  
福祉のデザインとアートで  
障がいのある人の「しごと」  
を考える事業 報告書



LIBERTE

特定非営利活動法人リベルテ

# もくじ



p.02 全体レポート

p.04 Circulation of life  
工房まる 展

p.08 オヤマタツヤ  
ロマンと冒険のガラクタ 展

p.10 神林美樹とBRIDGE 展  
妖怪や人、街を自由につくるひとと、  
隅っこを照らす航海中の船。そして、  
その船長についての1ヶ月と2週間の  
展示会

p.16 福祉のデザインとアートで障がい  
のある人の「しごと」を考える連  
続ワークショップと、障がいのある  
人が福祉サービスや支援につい  
て知る4日間

## ワークショップ

ろう引きふうとうをつくろう  
MAGU MAGU sea-ru world  
雷カードケースづくり

## トークイベント

障がい者福祉サービスはどうやったら  
利用できる？  
障がいのある人が働くためにどんな  
支援を利用できる？

p.22 Hello! Hallo! Hello! 展  
バッグから始まる3つの出会い

p.23 これからのこと

## 全体レポート 福祉のデザインとアートで障がいのある人の「しごと」を考える事業について

2015年度より3ヶ年計画で『福祉のデザインとアートで障がいのある人の「しごと」を考える事業』という事業をリベルテで取り組み始めました。今年度（平成27年度）は長野県地域発元気づくり支援金を活用し事業を実施しました。この長い事業名がこの事業そのもののコンセプトを言い表している通り、ここで考えたいことは『障がいのある人の「しごと」』についてです。

「しごと」と、ひらがなで表記についてしますが、一今企画のトークイベントの際に工房まるの池永氏からも指摘されましたが一本企画が考えていきたいところのひとつに、この「しごと」ということがあります。個人的な話からになってしまいますが、代表である自分がリベルテを立ち上げる以前は、重度の知的障がいのある人たちと一緒にすごし、表現活動や日中活動の支援を行う支援者でした。今回の企画のひとつである「オヤマツツヤ」展で紹介させて頂いた小山氏が現在働く、風の工房で勤務していました。就労にかかる生産活動や箱折りのような受注活動こそしていませんでしたが、歴代の代表やリーダーが障がいのある人たちの日々のすごし方や、その人自身がイキイキと主体的に生きる場所になれるようにと考えつくりあげた支援が風の工房では絵画や粘土、フェルトや織りなどの創作活動でした。障害者自立支援法が施行し、福祉事業所がそれぞれのタイミングで新しい制度に移行していく、その最中に自分は福祉の仕事を始めました。就労の場や日中活動の場など、障がいのある人の生活を支援する仕組みが整っていく中で、施設の役割も整理されていく時期でもありました。制度が変わる中で、サービスや事業所を利用する人「自身」が主体的に何をどう日々や時間を営むのか、支援者にとってはそのことを考え、環境をつくっていくことが、とても重要なことだと当時、強く感じました。受注の仕事やアート活動、運動でも、主体的に活動することや生活の中で自身の役割をもつこと、そのような意味で「しごと」ということを当時のチームや組織の中で検討してもらいました。そうした経緯が今回の事業名につけた「しごと」という言葉にあります。現在、リベルテが運営する障がい福祉サービス事業所では就労継続支援B型と生活介護を運営しており、今度は自法人として「しごと」というものをどのように捉え、そして「仕事」とどういった関係や関連をもつのか、考えていくきっかけにしたいと考えています。このように自分たちを省みながら、障がいのある人たちとの仕事や働き方を社会や地域の人たちへ投げかけたり、逆に投げかけられたりと、交流を提起していく事業にしたいと思います。

福祉のデザインとアートについても、今回は支援者の取り組みを、障害福祉の関係者以外にも知ってもらおうということを起点に企画しました。『Circulation of life「工房まる」』展では、障がいのある人たちと支援者が、「特定非営利活動法人まる」のコンセプトやポリシーを共有しながら、役割分担し、社会に積極的に発信していくことや、そ

や、そうした背景から生まれてくる「工房まる」の雑貨や取り組みが持つポピュラリティを紹介しようと試みました。常に障がいのある人たちとともに、活動を展開していくことで商品だけではなくそこに通う利用者の方の関係性も広げていく仕事をトークイベントで工房まるの主任である池永氏には紹介して頂きました。風の工房の支援員であり自身もアートやデザインをライフワークにされている小山達也氏の個展では、普段、障害福祉に興味のない方として美術やギャラリー巡りに興味のあるという観光にいられていた方が、鑑賞されていきました。トークイベントでは、支援者としてどこまで利用者である障がいのある人の作品作りや活動に介入して良いのかという葛藤も話して頂きました。一緒に取り組んだ作品が東京から全国に巡回し、そしてお菓子のパッケージに使用されたという事例も紹介して頂きました。神林美樹氏の作品展示では、企画制作室Bridgeの小林あかね氏に協力をしてもらいながら神林氏の制作現場へ案内してもらいました。Bridgeの取り組みのトークイベントでは、支援者と利用者との関係性を新しい視点で見出し、社会につなげる役割としての中間支援のことや現在の仕事について話がありました。また新潟から神林美樹氏とその支援者である大原さんにも展示期間中に見て頂く機会に恵まれました。Hallo!Hello!Hallo!展では、全国より、各福祉施設で働く支援者が選ぶ「おすすめのバッグ」を並べるという企画を行い、賑やかな展示が実現しました。更に県内の3つの障がい者施設で実際に取り組まれている日中の仕事や活動を、一般の方向けのワークショップとして実施しました。詳しくは、各施設の支援者のレポートを読んで頂くと当日の様子や雰囲気や伝わるかと思えます。そして、地域の方や当事者やその家族向けに、障がい福祉サービスを利用したり、障がいのある人が就労の支援を受けるための仕組みなどについて、上小地域障害者自立生活支援センター 基幹相談支援センター ウィングの所長である橋詰正氏と上小圏域障害者就業・生活支援センター シェイク センター長の向後泰雄氏の両氏に解説していただきました。その後、個別面談の時間も取って頂きました。全体を通して「はたらく」ということを、支援者それぞれの活動や取り組みを通して、改めて障がいのある人たちと一緒に考えていく機会やヒントに溢れた企画にすることができたと感じています。展示やイベントにご参加して頂いた方はもちろん、今企画の『福祉のデザインとアートで障がいのある人の「しごと」を考える』というテーマにそれぞれのかたちで出展や準備をして頂き参加してくださった皆さま、本当にありがとうございました。

特定非営利活動法人リベルテ  
理事長 武捨和貴

## 展示会

# Circulation of life 「工房まる」展

会期：2015年4月14日(火)~6月6日(土)

時間：10:00-16:00

会場：ギャラリーグリーン

### 展示会概要：

福岡県で活動を展開している、

特定非営利活動法人まる 障害福祉サービス事業「工房まる」。

そこでつくられている商品の展示販売を行った。

生活雑貨をつくるアトリエとしての「工房まる」。

障がいのある人もない人も一緒に「いる」ことができる

地域生活の場としての「工房まる」。

アートとケアが交差し生活の中に立ち現れる

「場」としての「工房まる」。

「生活の循環」と、日々の「生活の中の maru」

というコンセプトで工房まるの雑貨や取り組みを紹介した。



自分のお気に入りとして、

思わず「〇」としたくなるようなものや

「maruの哲学」にあるような

「ひとりひとり、いろいろで、まる」

という障害のある人の手作りのプロダクトが

つくり手から消費者へ生活の中で循環し、

差異をも共感や肯定していく思想を

工房まるのアートワークを通じて紹介した企画。



Voice

place

Life

## 特定非営利活動法人まる 工房まる

1997年に福祉作業所として開所。現在は、障害のある約30名のメンバーが、2つのアトリエを拠点に創作を中心に活動している。カフェや美容院など、日常に在る場所とコラボする作品展やイベントを企画。様々な人々と「時間」や「空間」といった“間”を共有することで、障害の有無にある“あいた”をほかしていく仕掛けを行う。オリジナルグッズの制作をはじめ、Tシャツなど企業とのコラボ商品多く、イラストの起用も多岐にわたる。

福祉のデザインと  
アートで障がい者の  
「しごと」を考える  
トーク

Topic Provides ①

「工房まるの日々」

2015年6月6日(土)

18:00~20:00

@ BOOK & CAFE NABO.

長野県上田市中央 2-14-31

工房まるのアートワークや取り組みとその背景にあるアトリエで日々生まれるストーリーを紹介した。

Speaker 池永健介氏

(NPO 法人まる 工房まる主任)

2007年より工房まるに勤務。展示会やイベント、およびグッズの企画を主に、作品管理や

権利関係の整備、工賃の体系などの仕組みづくり

を担当。現在も試行錯誤が続いている。

## 「工房まるの日々」

NPO 法人まる 工房まる主任 池永 健介 氏

工房まるは創作をメインに活動している福祉施設です。これまでって言うか今でもですけど主に絵画作品、イラスト作品を通して展示会やアパレルメーカーとのコラボを始め、色々な動きや色々なつながり方をしてきました。今回、リベルテさんでやらせてもらっている展示会はmaruの“クラフト”展になります。maruでは「クラフト」という位置付けで、陶芸と木工もやっています、絵画は「表現活動」として本人がやりたいように、できるだけそれを支えていくようなかたちをとっているんですけど、「クラフト」はあらかじめ商品化することを前提で取り組んでいるので、絵画とは本人へのアプローチも違ったり、どういう商品を作ってくか、どんな商品を推していくかだったり、その辺は「表現」だけに依らないプロセスでもあるので、今日は“maruのクラフト”の話を中心にさせて頂きたいと思います。

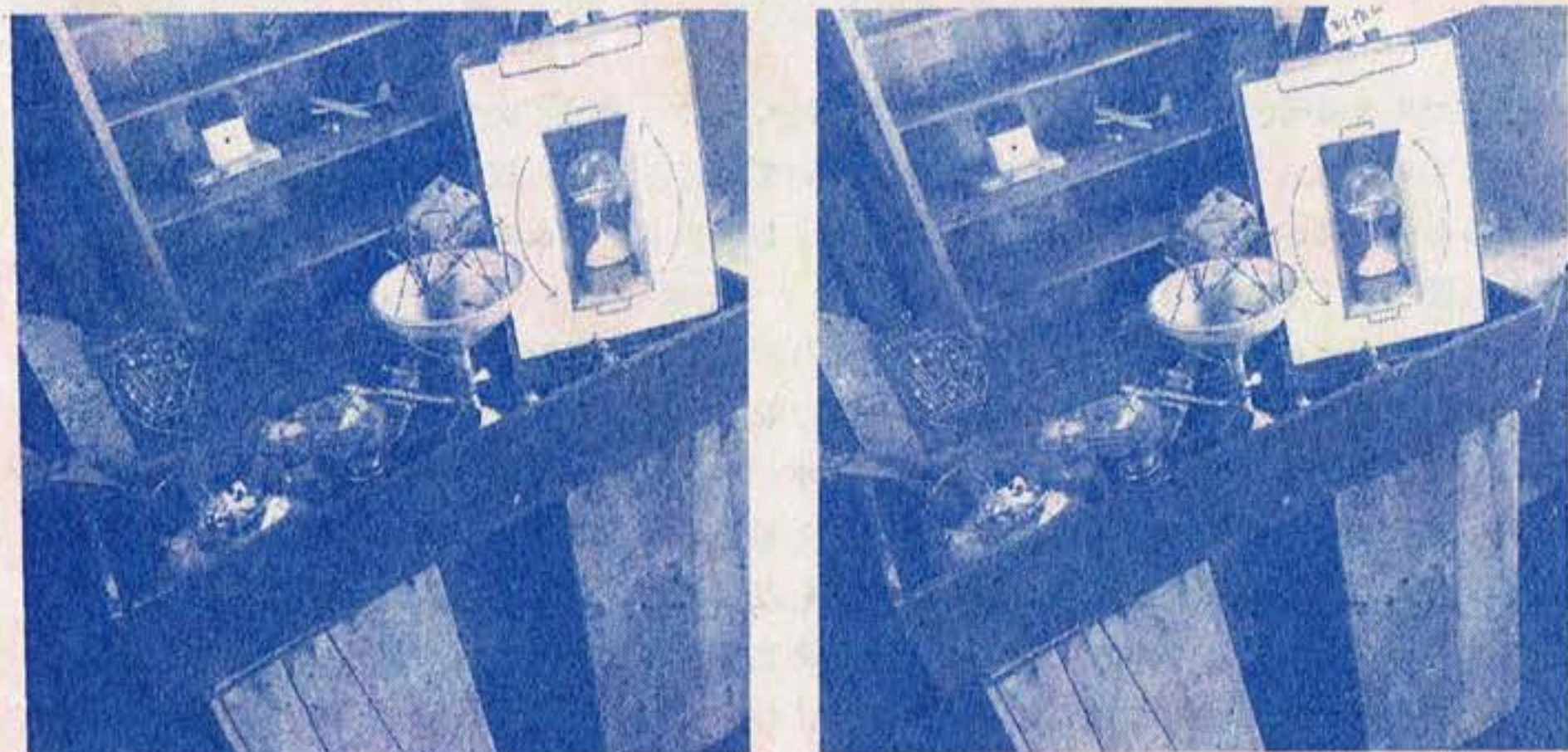
「仕事」の定義とかって言うのはすごく曖昧で幅が広いと思うんですけど、工房まるでは先ほどあげた「障害の有無にかかわらず、人と人としてシンプルな関係を作っていける世の中に」というミッションに対して、それを果たす上で、自分らしい表現だったり挑戦をすることをメンバー（工房まるでは、利用者のことを「メンバー」呼んでいる。）の仕事となります。それを一緒に模索していこうと。また、スタッフの仕事は、そこで生まれたものを通して、社会との繋がりを広げていくということ。メンバーそれぞれが、何か表現したり事を起こさない限りは、僕らスタッフも繋げる材料がなくて何も動きようがないわけで、その点からもmaruの中での役割分担として、maruの「仕事」をメンバー1人1人が担っていると考えています。ただやっぱり色々なメンバーの方もいらっしゃいますし、先ほど“模索”って言いましたけど、maruで何をしようか、何をしたらいいのかなかなか分からない方とかもいらっしゃいます。でも、色々な何かを一緒に考えたり見つけていく上で、その手がかりはその人らしさや所作・行為の中に既にあるものだと思いますし、またバリバリに絵を描かれたり何かに取り組んでる方たちでも、より主体的に何かもう一つ先を目指していけるような、メンバー各々に応じた創作・モノづくりの環境を整えていく部分が、スタッフの大きな役割だと考えています。

そこらへんの事例や、スタッフの役割、視点のところを踏まえて、陶芸の紹介をしたいと思います。まめ皿ですね。ちっちゃくてコロンとしたお皿を作ってます。僕がmaruに入った8年前は、今よりメンバーの人数も少なく、陶芸をメインでやっている方もお一人だけでした。陶芸教室で習うような作り方はなかなかちょっと難しく、maruを見学に来た学生さんに陶芸を専攻してた人がいたので、その子にアイデアをもらって、叩いて作るっていう成形をやっていました。道具は100均で大体揃っているんですけど、キッチン用のボウルに土をある程度伸ばしたやつをひいて、それをこう棒で叩くんですけど、その棒自体けっこう色々改良はしていて、最終的にガチャガチャってありますよね？

景品がでてくるやつ。あのカプセルを竹の先にくっつけてって言う別になんちゃいやつなんですけども。それでトントントントン叩いてって、一枚一枚こう表情が違うって言うところを売りに、売りというかそこを面白みとして、トライ&エラーしながらやっていますね。叩くって言う行為ですね。

引き出物などの贈り物にも使ってもらったり、釉薬の色も安定してラインナップも揃って販売数も増えてきたので、年度末に振り返りをしたら、本人も喜んでいて、「よかったねえ〜」と分かち合うつもりで言ったら、ボソボソと「飽きた・・・」と。聞き間違いかと思って「もう一回聞いていいかい？」と尋ねると「飽きました」とはっきりと言われて。彼も決して手先が器用とかってわけでもないのに、さてどうしようか、次何やろうかな、どうやって作ろうかなと思って、とりあえずどんな動きが出来るかって話をしながら、たぶん色々作ったりはしてみたんですよ。「握る」とか。たまたま、彼の手の中でできる物って言うのは小っちゃいし、それを箸置きだって言い張ってもいいけど、ウーンどうだろう、そもそもまめ皿作りに飽きた彼が、やりがいもってやれるのかってこともあって、じゃあ大きい物だったらどう出来るのかな？ 本人もお皿は作りたいたか言ってるし、それで、ボーリング玉を土にボンと乗せてコロコロってやったら皿が出来るよね、とか適当なこと言ってたら「うん、いいかも」とちょっとノってくれた感じはあって、じゃあ近いうちにでも、ボーリングに行こうかと話をしたら、ボーリング場でホントにボール買えるのかなとか考えたりしたら、その翌週、普段あんまり彼が自分から話しかけてくることはないんですけど「池永さん、ボール買ってきました」と。ボーリング玉を？よくそんな重いもの持ってきたな、と思いながら、どこに置いてるの？って聞くと、車イスの後ろにかけてあるカバンに入ってますと言われて、どう見てもそんなに膨らんでもない普通のショルダーバッグを開けてみると、電球くらいの大きさの木製のボールが入っていました。「これどうしたの？」と聞いたら「休みの日にガイド（ヘルパーサービス）を使って買ってきました。」って言われて、ジーンとしたのを覚えています。ボール自体は一緒に計画してたはずの重さでも大きさでも全然なかったんですけど、まめ皿の評判が上がっても「飽きた」って言うくらいだから陶芸自体を別に好きでやってるわけでもないのかなって言うのも正直あったんですけど、自分で休日に出かけてボールを買ってきたっていうのは、予想外にしてなかったんで、僕にとっては嬉しい出来事でした。こういう休みの日に自分でボールを買ってきたとかキセキだと思っているところもあったんですけども、最近は割と研究熱心な人もいて、陶器の展示会とかに休みの日に見に行ったりしてるようで、自分の作っている商品について「お茶わんの方がカフェボウルより売れると思います」ってアイデアの話をすることもあります。僕も「でしょ？薄々感じてたんだよね」とか言いながら。

## 展示会



### 『ロマンと冒険のガラクター オヤマ タツヤ展』

会期:2015年6月9日(火)~6月27日(土)

場所:ギャラリーグリーン(特定非営利活動法人リベルテ)

小山達也氏のライフワークとして職場である風の工房での仕事や作家活動やコレクションなどを紹介することで障がいのある人に「関わる人」の背景に焦点を当てていく企画。自身もアートをライフワークとして捉え、創作やアンティークのコレクションやデザイナー活動を行っている小山達也氏。その取り組みに焦点を当てることで、支援に「関わる人」自身の取り組みや趣味などが創作活動として、または支援として、障がいのある人との関わりの中でどう影響し、どう相互の関係性を築くのか考える展示会。

福祉のデザインとアートで障がい者の「しごと」を考えるトーク Topic Provides ②

6月27日(土) 18:00~20:00 ギャラリーグリーン/リベルテ

### ライフワークとしてのアートから 障がいのある人との創作について

Speaker 小山達也氏(風の工房支援員)

ライフワークとしての「アート」から障がいのある人との創作について、創作の現場づくりやそこから生まれてきた作品やワークについてのトークイベント。

福祉のデザインとアートで障がい者の「しごと」を考えるトーク (抜粋)

### 「ライフワークとしてのアートから障がいのある人との創作について」 風の工房 支援員 小山 達也 氏

自分も、もの作りとかクラフトワーク的なことも好きなので、デザインをやりながらライフワークで粘土細工をつくったりして、やっぱり物を作っているんですね。気が付くと。デザインのいい部分、やっぱり仕事でもあるんだけど社会と関わる、自分の喜びみたいなものが共有できることってあるんだなって、ずっと気持ちの中の引き出しの中にあったんです。長野に来た時に、おもちゃ病院っていうチラシを見て、自分がおもちゃ好きなもんですから「オモチャの病院?」「なんで?」とか思って。オモチャを直すっていうボランティアを立ち上げたいっていう趣旨のイベントだったんですけど、そういうことに前触れ無くて参加してみようと思っただけで行ったら社会福祉協議会が関わっていたんですね。やりたいっていう人の教室を作った。そこから福祉に関わるようになりました。前から「風の工房」という名前は知ってたんです。長野県の信濃美術館でも大きい展示会があった時に、見に行った記憶はあるんです。見に行ったら凄い大きい展示会。数もすごかったです。パネルとかでかいベニヤ板の大きい作品もあって、パワーがあった。そこから色々な縁で、風の工房が所属するかりがね福祉会へ就職ということになったんです。上田なので越さなきゃ引越さなきゃいけないので、ちょっと色々あったんですけど、結果的に来てよかったなと思って今は感謝しています。

支援の中で、ある利用者の方は自分一人でやってるわけでもないのに、やっぱり色々な方と交代で支援しています。私が前職でデザインとかもの作りしていた人間なので、ついつい過剰に手を出し過ぎたりとか手伝いすぎたりするところがあって。それも含めてどこまで支援していいものなのか、どこかで「引くべき」か、とか、どこまでが許容範囲かとか。今もそうなんですけど悩みながら関わっています。出来ればご本人の味や充実感、「自分で仕上げた!」っていうところを意識しながらお手伝いしたいなって思っています。

出来るだけ本人が心地よく作業できるようにと道具を探しに行ったりするんですよ。ホームセンターとかそういうところに行って。どうやったら出来るだけ本人に負担かけないで、ご本人も満足出来るような。「万力」みたいなものとか、ダンボールを切る専用のカッターとか、色々探してきて買ってきてやってはいるんです。けどそれでもなかなか思うようにならないことも沢山あります。例えば、マジックペンってペンにキャップがついているじゃないですか。これ結構、便利は便利なんですけど、利用者さんにはキャップがきついときがあるんですね。だからそこら辺は手伝わざるをえない利用者さんもいるんです。だから細かいところを言い出すとそういうことも含めて、もうちょっと障がいのある方たちが使える設計っていうか、そういうことを企業に持っていったらもうちょっと世界広がるかな、広げられるのかなとか考えています。また何もしてないんですけどね。でも、それもデザイナーの使命だとは思ってるんですけどね。ちょっとそういうことも含めて考えたいとは思っています。

# 神林美樹と BRIDGE 展



妖怪や人、街を  
自由につくるひとと、  
隅っこを照らす航海中の船。  
そして、その船長についての  
1ヶ月と2週間の展示会

会期:2015年7月14日(火) - 8月29日(土)

時間:10:00-16:00

会場:ギャラリーグリーン(特定非営利活動法人リベルテ)

新潟市の青松ワークス(社会福祉法人更生慈仁会)の利用者である神林美樹氏と、障がい者施設等のプロダクトデザインや喫茶のプロデュースと平行し、障がいのある方などの作品展の企画も行っている企画製作室Bridgeの取り組みを紹介。

神林美樹氏は、自身の想像力と直結させて流木や廃材、もしかしたらゴミかもしれないものを動物や妖怪、街などに「見立て」数々のオブジェクトを制作しています。彼の作家とも言える活動はひとりの支援員である大原さんによって創作として支えられてきました。そして彼の表現とオブジェは、Bridgeの小林さんとの出会いと展示会を通じ、人々に紹介されました。施設外の人や同じ施設の仲間にも鑑賞され、そこで販売されることで「作品」として共感されることになりました。「展示会」がきっかけとして「表現を支援する」ことが共感されるというサイクルにつながりました。アートとデザインから、そのプロセスについて考えることは、「障がい者」への理解や共感についてだけでなく、人それぞれ「自分」自身が向き合っている障がいについて考えることにもつながっていくのではないのでしょうか。神林美樹氏の作品とそのサイクルがひらけるきっかけをつくった企画製作室Bridgeの取り組みをプロデュースされたプロダクトとともに紹介。アートやデザインが関わることで肯定される「しごと」について考えた企画展。

2015年7月25日 18:00~20:00

福祉のデザインとアートで障がい者の「しごと」を考えるトークTopic Provides ③

Speaker 企画製作室Bridge 小林あかね氏  
“アートとデザインがひらく「しごと」への  
新しい共感のサイクル”



つくるひとについて/  
神林美樹(かんばやし・よしき)

知的に障がいがあり青松ワークスを利用しながら、そこで作業をしたり、制作をしている。「男と女」「妖怪」「昆虫」「動物」「影」など多彩なシリーズの作品を黙々とつくっている。神林さんの作品が保管されている倉庫(の一角)は、支援者の大原さんが神林さんの為に施設敷地内に確保したもので、今でも増え続けている作品はそこに(その場所があるから)残されていく。

航海中の船について/  
企画製作室Bridge [sumikkobridge.com](http://sumikkobridge.com)

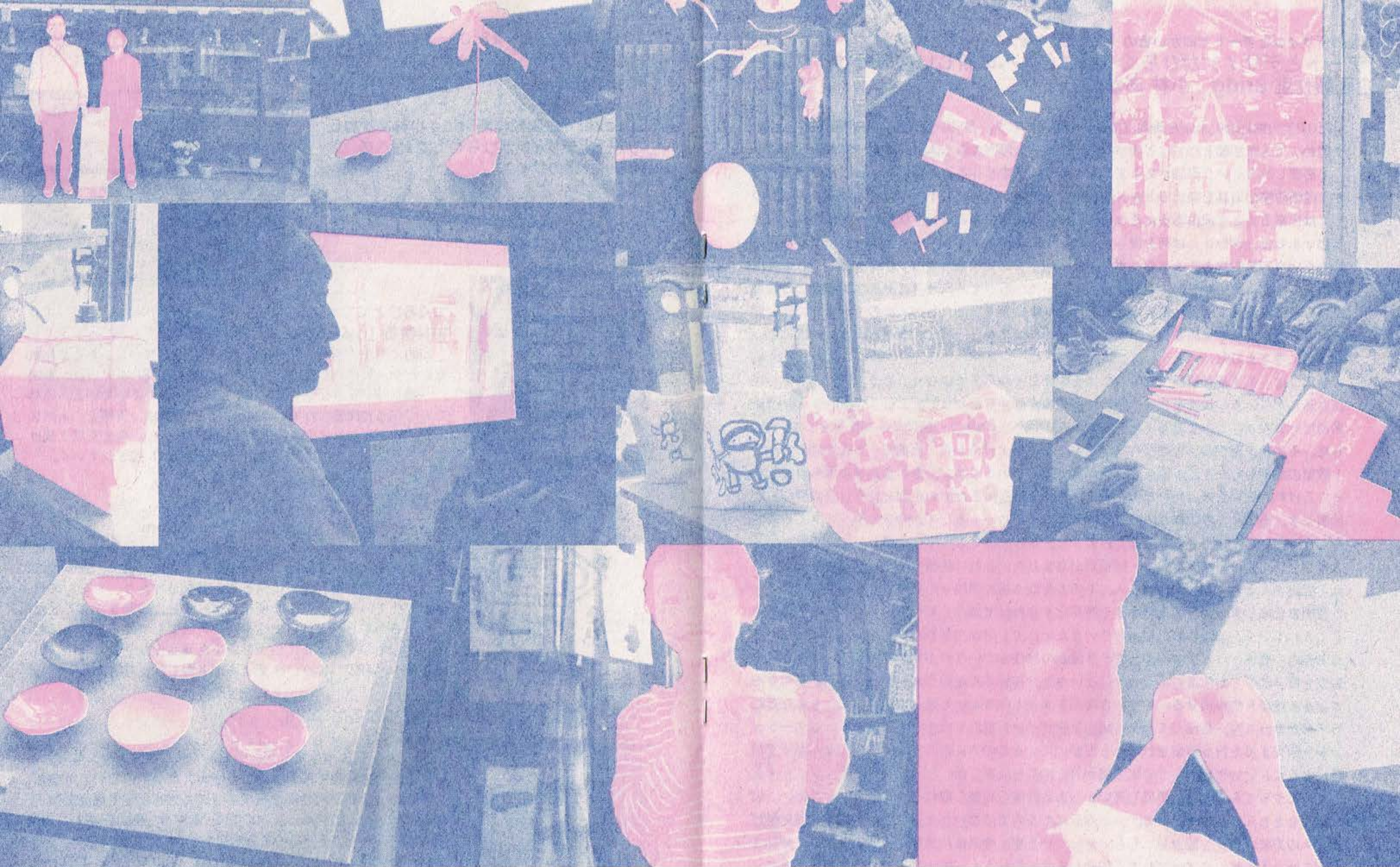
だれにも見つけられず、変わらず、淡々と、何事もなかったように平和にたたずんでいる人やものに、光をあて、違う表情を見せてくれたり、遠くに居る人を勇気づけたり、そのもの自身が変化をみせたり、その変化によって社会が動きだすことだってあるかもしれない可能性や新しい価値をつくるために活動中。世の中のすみっこに焦点をあてた商品作りや企画立案、出前アート、ものづくりコーディネート等を行っている。



その船の船長について/  
小林あかね



1978年、新潟市生まれ/成安造形大学卒業。大学卒業後、石川県金沢市に拠点を移し劇団アンゲルスに美術担当として参加。同時に、金沢市内の福祉施設各所にて芸術活動や商品開発・企画のサポートを努める。2010年、新潟市へ拠点を移し、福祉施設で作られている製品の企画販売を行うため、福祉プロダクト企画・販売『koro/art & design in welfare』を立ち上げる。また『出前アート』業務も行い、学童や福祉事業所、幼稚園などにアートプログラムを出前・提供している。2014年『企画製作室Bridge』を立ち上げる。





福祉のデザインとアートで障がい者の「しごと」を考えるトーク (抜粋)  
「アートとデザインがひらく「しごと」への新しい共感のサイクル」  
企画製作室 Bridg 小林 あかね 氏

2010年の秋に金沢市から新潟市に拠点を移しました。当時、金沢での福祉施設での仕事や関わってきた活動を経て、どの事業所・地域にも障害のある人と社会をつなげる仕事はきっと必要しれるという直感がありました。ラベルを少し作るみたいにならなくとも、美術教室の道具を揃えたりとか、環境を整えたりとか。何かをやるってことは福祉事業所の中では出来ることも沢山あるだろうけど、その環境を整えるという仕事が必要になるだろうと思いました。クレヨンは何を使ったらいいか、絵の具はどうやってどこで売ってるか、とかそういう初歩的なところでもサポートする人って必要なんじゃないかなって。それさえ出来れば、実際に利用サービスを受ける人にとって、もっとスムーズに表現活動に迎える環境や、もっと刺激的で面白い環境が作れるんじゃないかと思いました。なので、金沢で働いていたときのように福祉施設の一員ではなくて、外側から一緒に仕事をしようとして新潟に戻ったときに考えました。

新潟では、まず福祉施設で作られている製品をそのままではなくてもう一回、企画として持ち込んだり、その技術を使った新しい商品の企画から携わり販売を行う「koro」という名前での一つのユニットを立ち上げました。2014年ぐらいまで一緒に2人で仕事をしていました。その後、現在の「企画製作室Bridge」を立ち上げました。出前アートとか造形アート教室の開催もしたり、「隅っこ」的感覚と呼んでいるのですが、なかなか世に埋もれてしまっているけれどいいものみたいなものを引き出して光を当てるための企画を行う「企画製作」が仕事です。あと、その物作りのサポートとコーディネートとして、今までやってきたことをもう一回きちんと仕事として位置づけました。この大体3本柱で今仕事をしています。

今回、シーカーベットのですね。絨毯が出来ました。これは絨毯の柄を、神林さん・山下さん・塚田さんという絵を制作する人、その方を取り巻く環境そのものごとを商品化するという意図で企画しました。個人の才能を商品化するわけではなくて全部ひっくるめたものをここに置いていく。一つの商品に入れていきたい。でも何が出来るかなと思った時に、そうすると作者の感性だけではなくて、プラス誰かの感性っていうのが交わる商品、かつ手作業でもう一度「仕事」が生まれることではないかと。神林さんという人が作った作品からもう一つ誰かの仕事を生み出せる、そういう商品をずっと作りたいと思っていました。そんなところに縁があって今、新潟でモロッコ絨毯をデザインし現地での作り手とのコミュニケーションから販売までを行う事業されている方がいて、そこの方に相談した時に「絵なんかすぐ絨毯になるよ」という話からここまで繋がらせてもらえました。

それでやってみよう。単価も高いからある程度の利益も取れるから自分がやりたいと思う仕事をきちんと続けていける、良い商品になるのではないかという話から先程名前を挙げた3人の方に、作品を協力してもらって作っています。今回は神林さんの展示会なので神林さんっていう人をピックアップしてご紹介します。神林さんっていう人は本当に昭和の人で、「水木しげる」が好きっていうベタな妖怪を作っているんですね。「青松ワークス」さんという新潟の西区、海沿いにある施設を利用されている方です。プレハブの中に木工室っていうのがありまして木工を部署があります。そこに神林さんがいます。そして、そこに施設の

職員として大原さんっていう人がいました。今は別の部署に異動しています。この施設はトイレトペーパーの長いやつをカットして、それを包むことを仕事として行っています。その仕事にマッチングしない人たちの部署が「木工室」です。

神林さん一人だけの努力では、自身の環境を作れるわけがないですね。知的に障がいがある、けど会話も楽しく出来る方なんですけども、でも全ての環境を自分の努力だけでは整えることは出来ない。トイレトペーパーをやりなさいと言われてやれるタイプの人なんだけど、物を作ることが好きだということも、大原さんに見出されていました。大原さんは、神林さんの後ろにいつも、こう抜群の「距離感」で見守るっていうタイプの支援者です。神林さんが好きそうなものを集めては置いておく。何かの端材を持ってきては置いておくとか。よく神林さんを知っているからできる環境づくりです。その大原さんがですね、木工室の違う部屋に神林さん作品保管庫っていう場所を作りまして。もの凄く毎日日々作って出来ていくので、大原さんが全部分類分けとかして置いていてくれる倉庫ができました。そんな風に作った作品を大原さんが保管をしてくれるっていうことがどうやら神林さんは凄く嬉しいらしい。ということに、大原さんが気づいたら、大原さんはよりもっと喜ばせたいので今度は展示会の企画をちゃんとやりたいと。やっぱりちゃんとした所で見てもらいたいっていうので、koroの当時にご相談を頂き、施設からも予算が出るからなんとか頑張って手伝ってもらえないか、と。そういう強い思いの職員さんです。

お金っていうものが出来ればいいということではなく、やっぱり最初に「喜び」をつくるのが目的にならないといけない。お金をつくるのが目的ではなくて、喜びとかやりがいとか、生きがいをアートとかデザインで作っていくっていうことが一つの目標になっているなと思います。その為にはやっぱり人の、たった一人の自分ほっちの感性だけで完結させないっていうことが一つ。色々な人の感性を上手く融合していくっていうことが私は大事なんじゃないかって考えています。神林さんにとって、大原さんの存在が凄く大きかったように、お互いの力を生かし合っていくっていう、そこに意識的になるっていうことが大事だと思うんですね。例えば、誰かの作品が好きだったからっていうのは最初の衝動です。大原さんにとっても最初に神林さんの作品が大好きだったっていうことは最初の衝動でしかすぎない。だけど展示会や商品づくり、課題や目標を達成していくために「最初は売上が必要だ」とか、「次はこういうステップが必要だ」ってことを具体的に考えて実行していくっていうことを、私が例えば、施設や支援者、神林さんや地域・社会との中間に立ったとき、そういうかたちで応援したいと思った。大原さんを私が応援するみたいな。そうすると私が応援する世界をまたお客さんが応援してくれるという何十にも回っていくっていう。きっとそのお客さんにもどっかで応援してくれる人がいてっていう。「神林さん」だけがスターになるっていったらおかしいですけど、注目されるべきところはそうする。けど、それだけではなくて、応援やファンを何十にも増やしていくっていうことが一つこれからの仕事の仕方として大事なことなんじゃないかなと思っています。

## ワークショップ

『福祉のデザインとアートで障がいのある人の「しごと」を考える連続ワークショップ』

2015年11月10日(火) 16:30-17:30

day1//「ろう引きふうとうをつくろう」

社会福祉法人森と木 アトリエキノ

アトリエキノの商品のひとつろう引き袋づくりを担当させて頂きました。ワークショップには小学校を下校した子供たちやご近所のお母さま方などぞくぞくと集まっていたいただきました。皆さん、1枚の紙を目の前に思い思いの絵を描いたり、ロウで加工したり、ひとつひとつの工程を楽しみながら作ってもらえたのではないのでしょうか。ロウを引く感覚はきっとやみつきです！とても楽しい時間を過ごさせて頂きましたありがとうございました！

社会福祉法人森と木 アトリエキノ 支援員 三井絵美子

アートサポーター 小林野々子

アトリエキノについて 長野県長野市平林1-30-33 <http://www.moritoki.jp/kino.html>

アトリエキノは、長野市にある障害のある人の表現活動を支援する小さなアトリエ。絵画、陶芸、造形など、ひとりひとりが心から楽しめる活動を行っている。キノは、ひとりひとりの個性から生み出される、その人だけの表現であふれている。



ワークショップの様子

ワークショップの様子



## ワークショップ

『福祉のデザインとアートで障がいのある人の「しごと」を考える連続ワークショップ』

2015年11月11日(水) 16:30-17:30

day2//「MAGU MAGU sea-ru world」

社会福祉法人かりがね福祉会 風の工房

Uさんが日々うみだしているカラフルな台紙。参加した方のアイディアと手が加わることで、Uさんの活動が「面白い可愛い素材」となり、新たなカタチをつくる楽しい時間になりました。Uさんのこと、風の工房のこと、障がいのある人のことを改めて考える機会にもなり、参加してくたさった皆様本当にありがとうございました。

社会福祉法人かりがね福祉会 風の工房 支援員 佐田芽衣

風の工房について 長野県上田市真田町長2464-1 <http://kazenokobo.karigane.or.jp>

生活介護事業所（定員20名）。現在、主に自閉症スペクトラム、知的、精神障がいがある方が利用されている。ニーズの多様化によりアート活動だけでなくその方にあったプログラム、環境の提供が必要となっている。「いきる」と「はたらく」をコンセプトに一人ひとりの歴史や想いを礎としそれぞれが夢や社会とつながっていけるようなサポートをしている。

## ワークショップ

「福祉のデザインとアートで障がいのある人の「しごと」を考える連続ワークショップ

2015年11月13日(木) 16:30-17:30

day2//「雷カードケースづくり」

社会福祉法人かりがね福祉会 OIDEYOハウス

今回のワークショップでは雷カードケース作りを見させていただきました。「どんな風にしようかな?」と考えながらやったり、直感やイメージでどんどん貼っていったり。その人その人のやり方・感性で徐々に仕上がっていく過程を、ワクワクしながら見ていました。出来上がった作品はどれも個性が詰まっていて、「楽しかった」「またやりたい」の言葉がとても嬉しかったです。

社会福祉法人かりがね福祉会 OIDEYOハウス 支援員 三浦晴佳

**OIDEYOハウスについて** 長野県上田市真田町傍陽8551-2 <http://oideyohouse.com>

OIDEYOハウスは、空気のきれいな山あいにある。OIDEYOハウスに通っている人たちは40名程。その中の10名くらいで、日々、雷グッズを制作している。雷グッズの材料は使用済みの米袋と看板店のカッティングシート。ピカピカ光っていて雷みたいだから。紙は“紙なり”に頑張っている、というメッセージが込められている。



ワークショップの様子



## トーク

「福祉のデザインとアートで障がいのある人の「しごと」を考えるトークイベント

2015年11月14日(水) 17:30-19:00

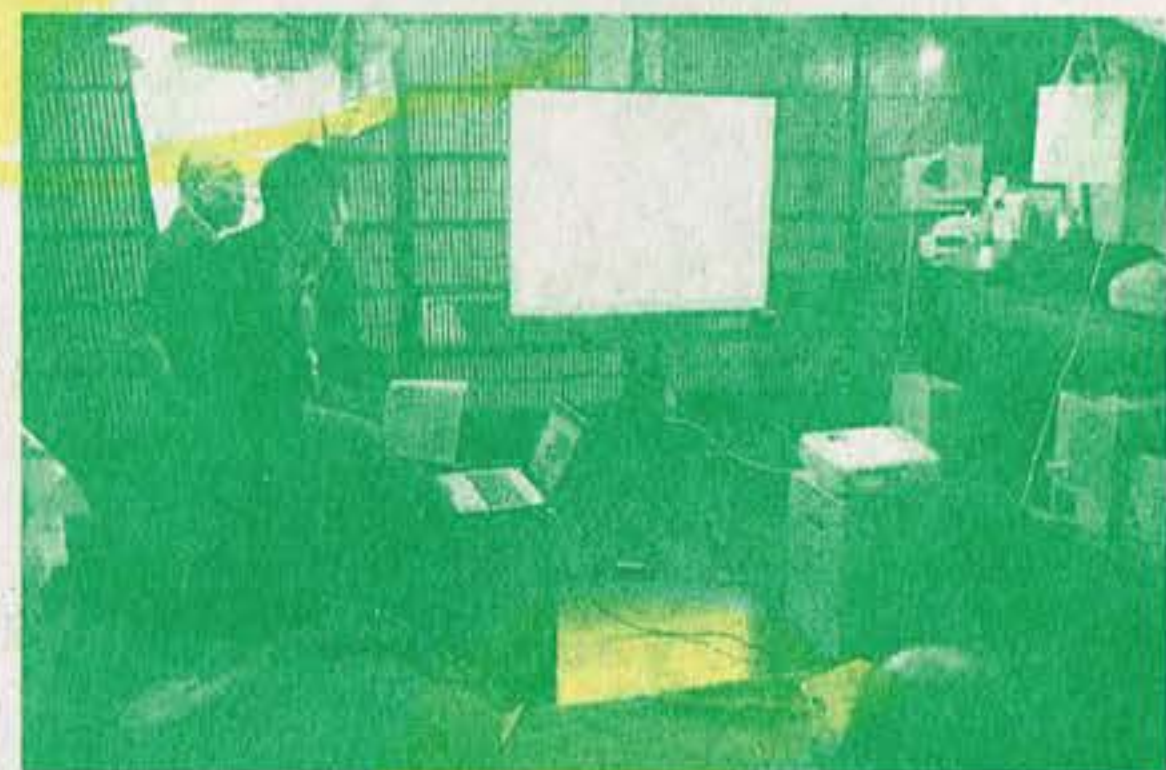
第1部 17:45-18:15

「障がい者福祉サービスはどうやったら利用できる？」

上小地域障害者自立生活支援センター

基幹相談支援センター ウィング 所長 橋詰 正氏

障がい者総合支援法における障がい福祉サービスを利用するための仕組みや、相談窓口や、また計画相談から始まるサービスの概要などを参加者に解説を行った。



エゴノキ

第2部 18:15-18:45

「障がいのある人が働くためにどんな支援を利用できる？」

上小圏域障害者就業・生活支援センター

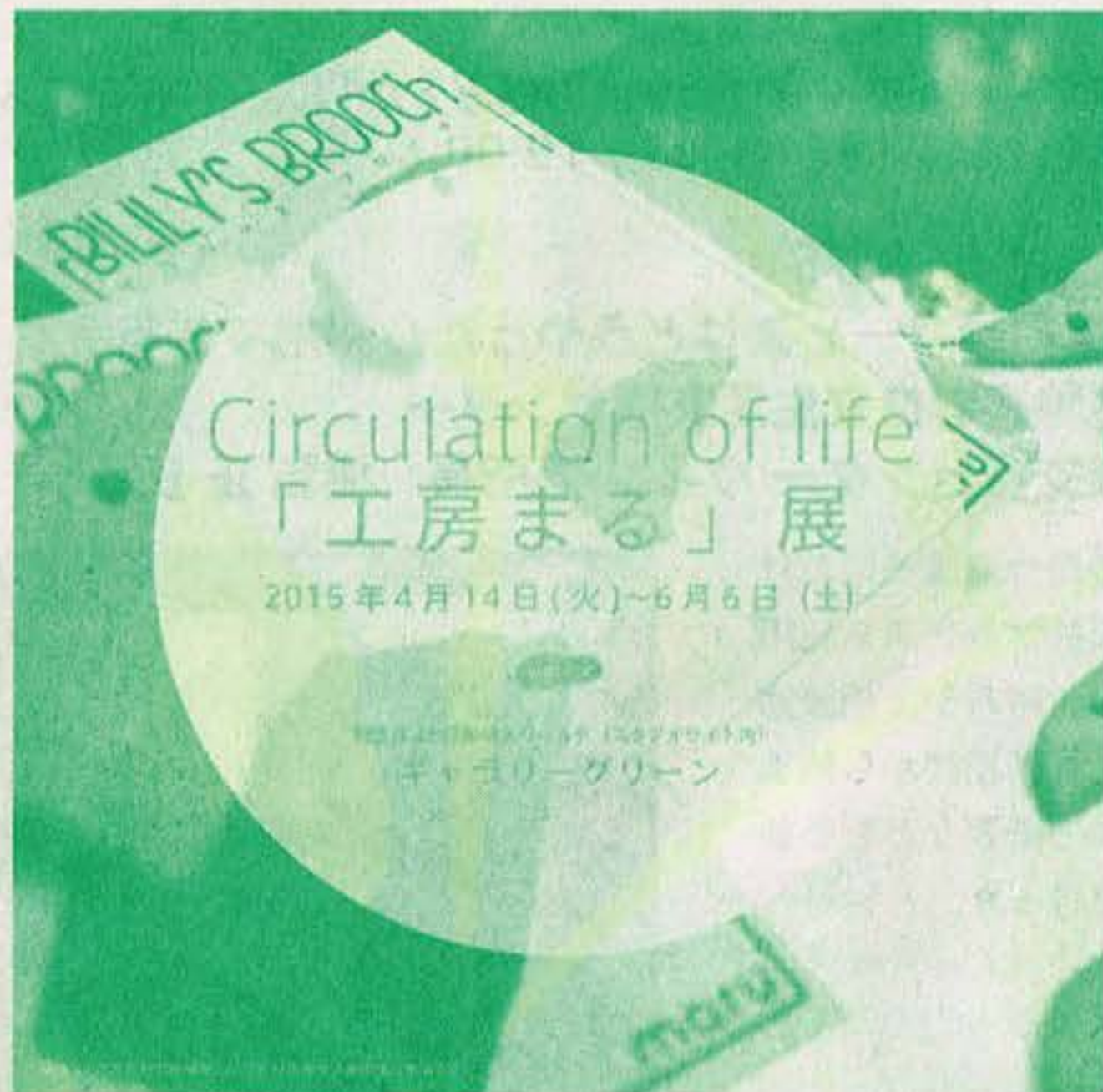
シェイクセンター長 向後 泰雄氏



上田市や長野県における、障がいのある人が働くために受けられる社会資源について紹介して頂き、各機関の支援や業務などについて、参加者に解説を行った。

質疑・応答・個別相談 18:45-19:00

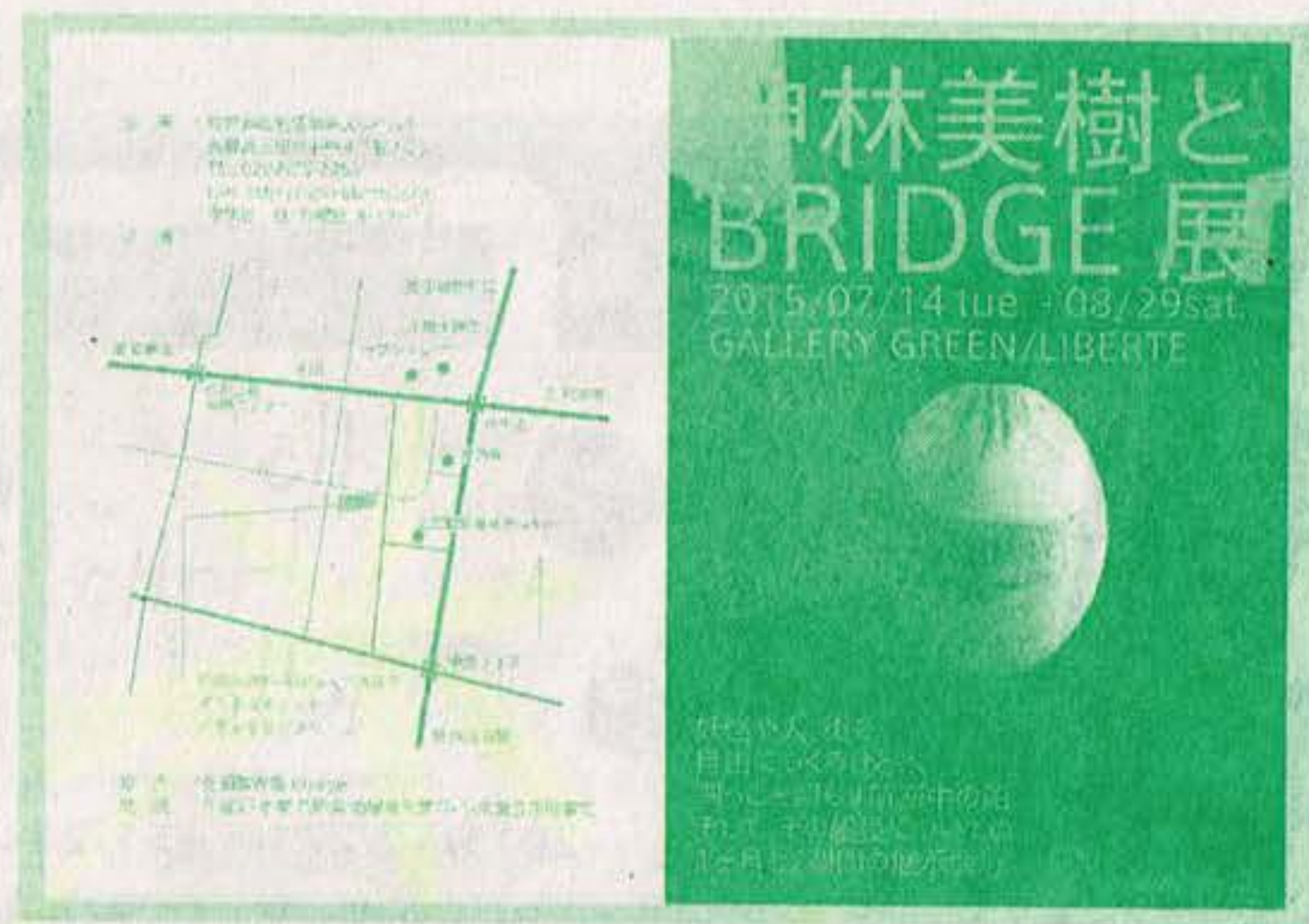
ネジキ



チラシ Circulation of life - 「工房まる」展



チラシ 「オヤマタツヤ ロマンと冒険のガラクタ」展



チラシ 神林美樹とBRIDGE展 妖怪や人、街を自由につくるひとと、隅っこを照らす航海中の船。そして、その船長についての1ヶ月と2週間の展示会



チラシ 福祉のデザインとアートで障がいのある人の「しごと」を考える連続ワークショップと、障がいのある人が福祉サービスや支援について知る4日間

Hello!  
Hallo!  
Hello!

ロゴ Hello! Hallo! Hello!



チラシ Hello! Hallo! Hello! 展 - バッグから始まる3つの出会い -

## Hello! Hallo! Hello! 展 - バッグから始まる3つの出会い -

会期: 2015年10月27日(火) ~ 11月28日(土)

場所: ギャラリーグリーン/リベルテ

### 内容:

スタジオライトで制作したバッグの他、全国の障がい福祉施設等で作られているバッグの中から、そこで働くスタッフが選ぶオススメBEST3 のバッグも並べ展示販売を行いました。

### キーコンセプト:

ここはギャラリーグリーン。

いつもビックリ、思わず笑ってしまうようなことがうまれるギャラリーです。

ギャラリーで出会うモノたちに、きっとあなたも思わず笑ってしまうはず。

そんな出会いを運ぶバッグを全国から集めました。

そして、街でそんなバッグを持ったあなたと私たちが出会ったら。

思わず笑ってしまうでしょう。

## これからのこと(まとめにかえて)

次期の『福祉のデザインとアートで障がいのある人の「しごと」を考える事業』では、「居場所」について考える機会にしたいと考えています。障害者自立支援法以降、施設や共同作業所などが、障がいのある人の仕事や受注活動、生産活動を支えてきましたが、それと同じぐらいに地域の中での「居場所」としての機能も果たしていました。

現在、「居場所」というものが当事者はもちろん支援者には現在はどうのように捉えられているのか。どう変容してきたのか。またはしていないのか。「地域の中にある」ことで福祉施設はどのような機能や役割を持ち得るのか。改めて、福祉施設が担っていた「居場所」ということについて考えることをこの事業の中で考えていきたいと思っています。今期の全体レポートにもある「しごと」という意味を福祉の中で考えていく上では、障がいのある人にとって地域の中にある「居場所」となっていた福祉施設やサービスの可能性についても再考してみる機会が必要だと考えています。また次回、老人介護分野の事業の紹介も検討しており、実現すれば多様な人にとっての「居場所」のこと、当事者にとってその意味や、支援者の働きかたについて、より深められるのではないかと考えています。

最後に、改めて今期の『福祉のデザインとアートで障がいのある人の「しごと」を考える事業』に協力を頂いた皆さまに心より感謝申し上げ、平成27年度の事業のまとめとさせていただきます。本当にありがとうございました。(文・武捨和貴)



LIBERTÉ 特定非営利活動法人リベルテ

## 福祉のデザインとアートで障がいのある人の 「しごと」を考える事業 報告書

発行日 2016年3月15日

発行元 特定非営利活動法人リベルテ  
〒386-0012長野県上田市中央4丁目7-23  
TEL 0268-75-7883  
MAIL mail@npo-liberte.org  
URL http://npo-liberte.org

企画・制作 武捨和貴（特定非営利活動法人リベルテ）

チラシデザイン

P.22 小松 順子

ロゴタイポグラフィ

P.22 Misaki Shimizu

背景イラスト

表紙-裏表紙、22-22 TAKEHANA

P.01、08-09、16-17 倉金 伸光

P.02-03 井出 勝俊

P.04-05、06-07 Masashi Ishiai

P.10-11、14-15 嘉澄 幸村

P.18-19、20-21 澤井 秀二

P.1、8-9、16-17 倉金 伸光

印刷・製本 レトロJAM印刷

助成 平成27年度 長野県 地域発元気づくり支援金